

1章. 輪島市の歴史文化の成り立ち

1-1 地理的・自然的環境

(1) 位置

本市は、本州中央部日本海に突出した能登半島の北西部に位置する。東は珠洲市および能登町に、南は穴水町および志賀町にそれぞれ隣接する。市域面積は 426.32 km²で、石川県の約 10.2%を占めており、東西 42km、南北 31km の広がりをもつ。また、北方海上に七ツ島(23km 沖)、舳倉島(49km 沖)がある。

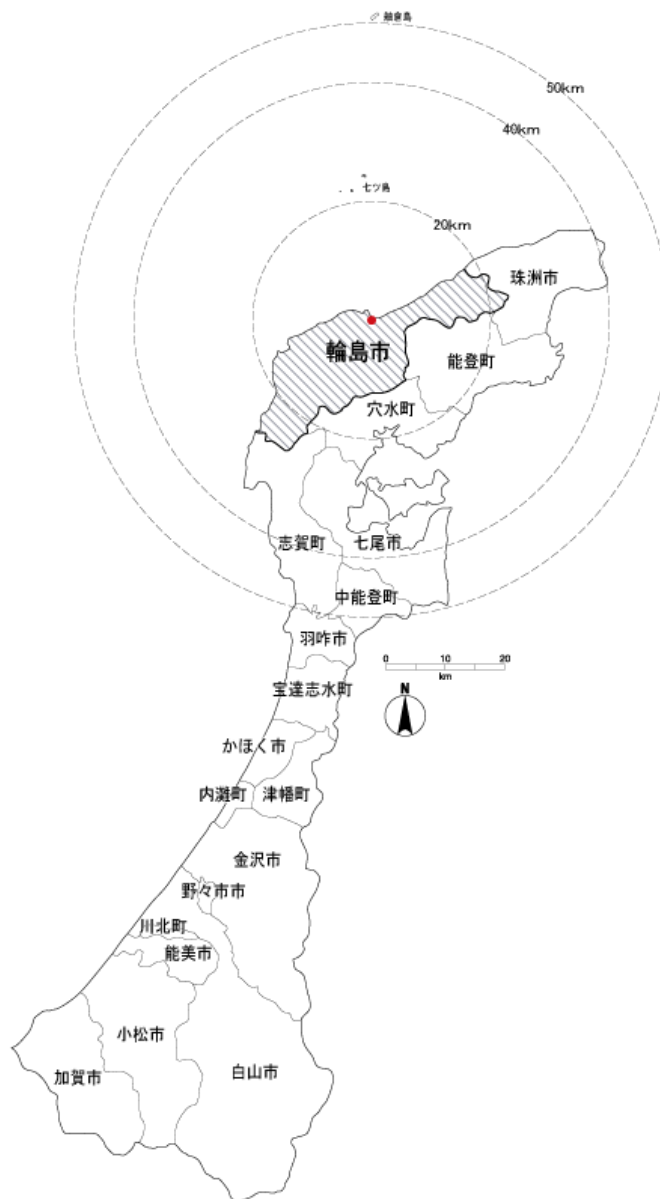


図 1-1 輪島市の位置

(2) 地勢

本市は、石川県北部の日本海に突出した能登半島北部に位置する。能登北部は能登山地、能登丘陵からなり、半島北部の北側を占めている。海拔高度 300～400mの比較的開析の進んだ山地で、東部の高洲山（標高 567m）が突出している。沿岸部の各所には海岸段丘が発達し、波浪浸食が著しく、荒々しい海岸地形がみられる。

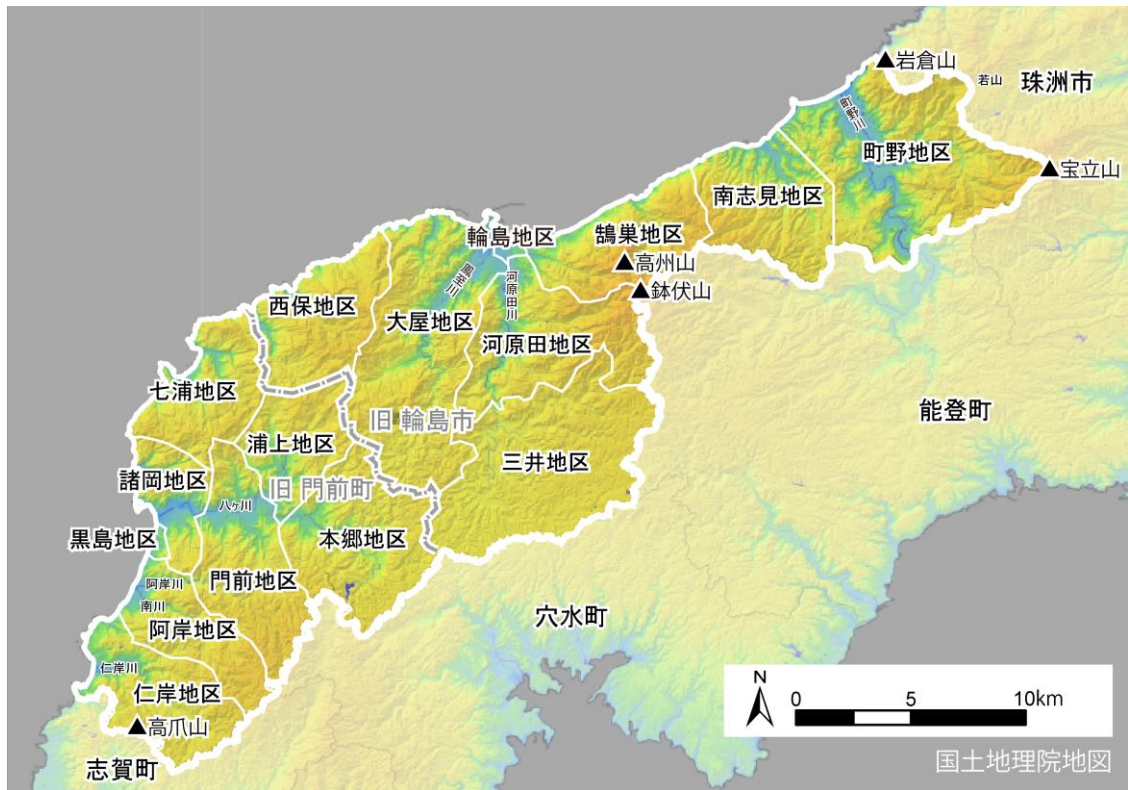


図 1-2 輪島市域



荒々しい海岸地形

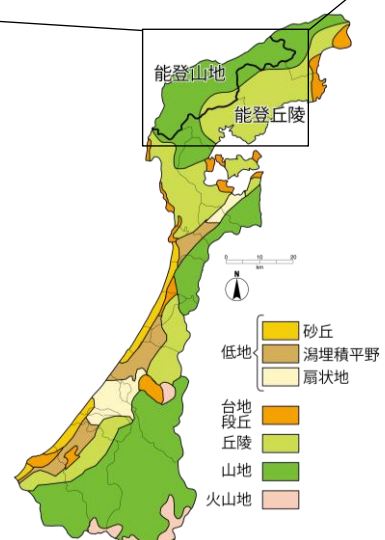


図 1-3 地形図

(3) 地質

本市の能登山地東部及び奥能登丘陵東部のうち、南側には主に中新世前期のデイサイト質火砕岩が分布し、その北側には中新世中期の沼岩層が分布する。東部にある町野町曾々木から東の海岸及び内陸には粟藏凝灰岩層と呼ばれる凝灰岩が分布する。また、曾々木の岩倉山付近には流紋岩溶岩(岩倉山流紋岩)が分布する。能登山地西部の門前町周辺には主に中新世前期の砂岩・泥岩・礫岩が分布する。また、先第三系の花崗岩類がごく一部に露出する。奥能登丘陵西部には、主に中新世前期の安山岩質凝灰角礫岩・凝灰岩・溶岩が広く分布する。

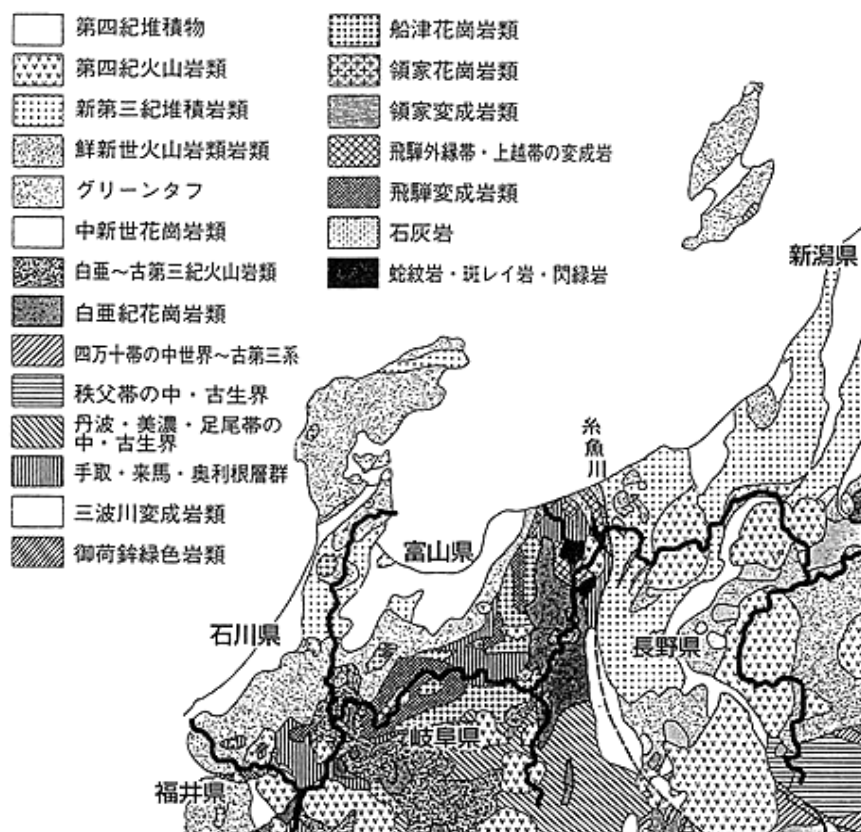


図 1-4 地質図

((財) 国土開発技術研究センター)

鳴き砂の浜 (琴ヶ浜)

本市の西部、仁岸地区では仁岸川下流域に鳴き砂の浜が広がります。これは、仁岸川上流の花崗岩類(石英)の細粒したものが流れ出て、水で洗われて表面の摩擦係数が大きくなると、触れたり踏んだりして砂に力がかかり「キュッキュツ」と音が鳴ります。全国で20数ヶ所あるといわれています。



(4) 気候

本市の気候は、暖温帯に属し、夏季は沖合から陸地へ吹く穏やかな北東の風が吹き、冬季は湿った北西の季節風が吹き付ける。この季節風は「あいの風」と呼ばれ、かつてあいの風を帆に受け、日本海を往来する北前船が本市に文化の多様性をもたらした。

平成30年以前の10年間の平均年間総雨量は2,736mmで、平均気温は14.2度前後である。本市は豪雪地帯に指定されているが、冬は比較的暖かく、平野部においては雪も少なめで、季節の移り変わりが鮮やかである。

本市では、昭和30年代に大雨による水害を度々経験しているが、河川改良に伴い大規模水害等は発生していない。市域では平成3年(1991)に大型台風による被害を経験しているほか、平成19年(2007)には輪島市西部を震源とする能登半島地震により大きな被害を受けた。

表 1-1 日照時間

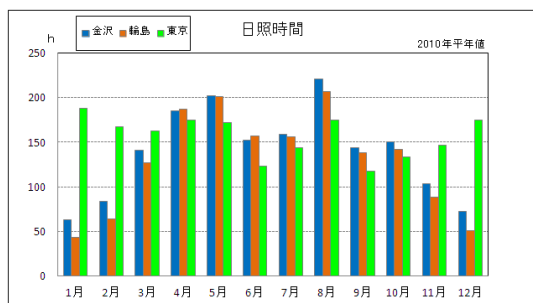


表 1-2 雷日数

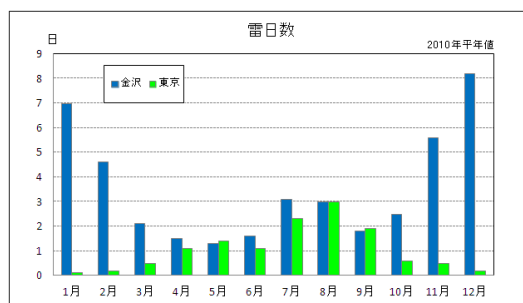


表 1-3 平均気温

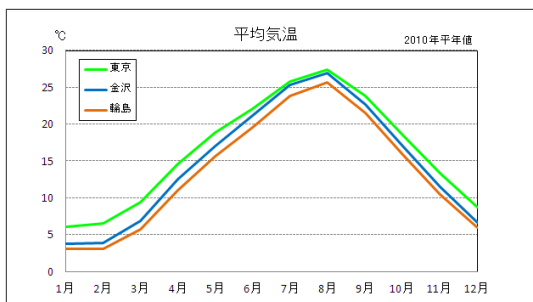


表 1-4 降水量

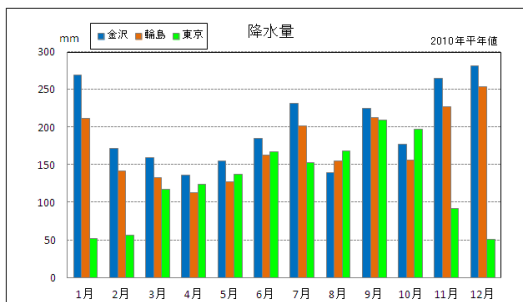
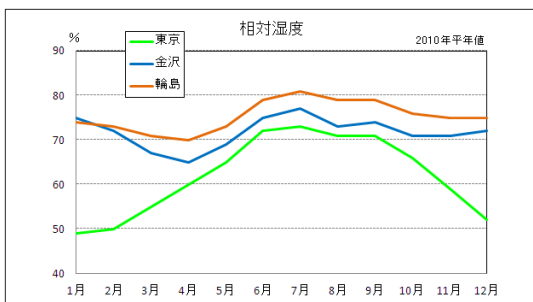


表 1-5 相対湿度



(気象庁 金沢地方気象台)

(5) 生態系

①植生区分

《自然植生》

自然植生とは、本来その土地に生育していた原生林などをいう。環境省による植生調査(第6・7回自然環境保全基礎調査)によると、本市では、冬季の季節風の影響を強く受ける沿岸部にはケヤキ群落、輪島港近くにはクロマツ群生や、イノダブ群落が残っている。

《代償植生》

代償植生とは、人間活動の影響によって置き換えられた二次林などをいう。本市では、標高の高い丘陵地はヤブツバキクラス域の代償植生であるコナラ群落が多い。

《その他》

河川沿いには水田が分布し、丘陵や段丘はヒノキアスナロの植林地が多くを占める。ヒノキアスナロは、「能登ヒバ(別名:アテ)」とも呼ばれ、湿気に強く、腐朽し難く、優れた耐久性を持っている。このことから、住宅の土台や外壁に用いられ、また、近年では伊勢神宮にも使われている。

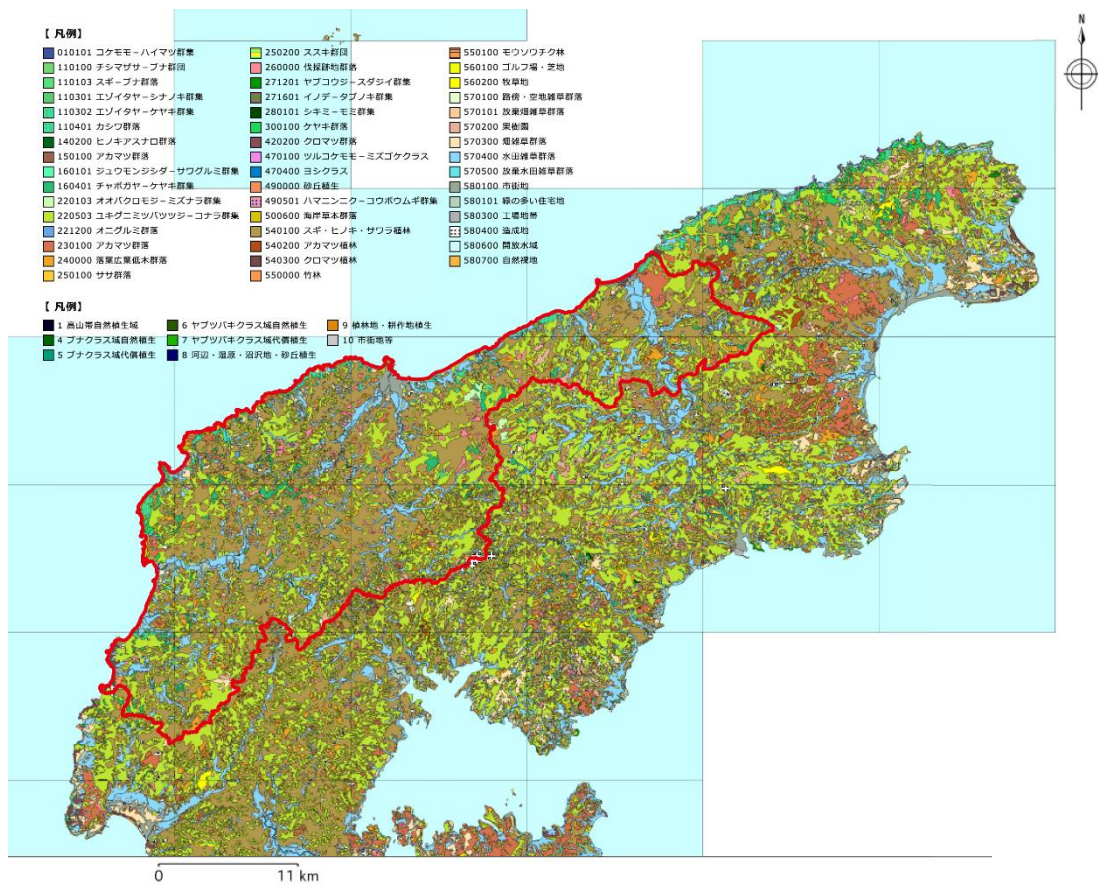


図 1-5 植生図

(環境省 自然環境局)

②重要な生態系

- ・哺乳類では、近年、目撃例が相次いだツキノワグマが輪島市内の山中で確認された。
- ・鳥類では、本市の沖合にある舳倉島は、大陸と日本列島を往復する渡り鳥にとって休憩ポイントとなっている。シロチドリやハクセキレイのほか、キビタキ、オオルリなどの希少なものも確認されている。
- ・昆虫類では、自然環境保全調査の調査対象種となっているクロモンヤマトヨコバイが輪島市内の丘陵地でみられる。
- ・両生類では、自然環境保全調査の調査対象種となっているクロサンショウウオは県内に広く分布しているが、市街地では特にみられない。
- ・淡水魚では、鳳至川には全国的に減少してきている種であるアユカケの分布が確認され、また、鳳至川と河原田川の下流部分では、サケとシロウオが確認されている。

シロチドリ

(分類) チドリ目チドリ科 *Charadrius alexandrinus*

(環境省 808 種) ー

(分布) 全国で留鳥。北日本のものは越冬地を越え、世界中・低緯度地域に広く分布。

(生態) 4～7月に海岸の砂浜や河原、または埋め立て地など一時的に攪乱されて生じる裸地の地上に営巣し、2～3卵を産む。おもに干潟・湿地で、ゴカイや水生昆虫やミズなどの小動物を食べる。

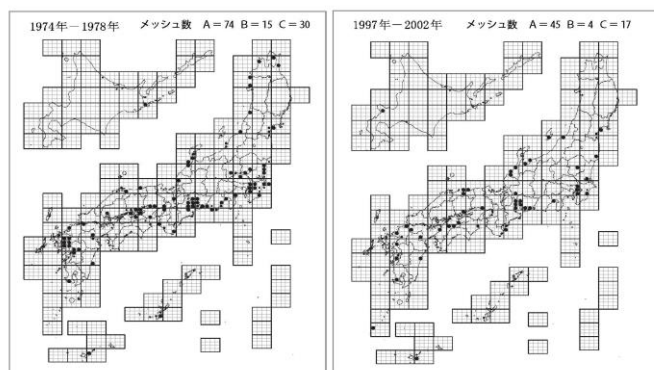


図 1-6 重要な生態系（鳥類：シロチドリ）の分布範囲

ハクセキレイ

(分類) スズメ目セキレイ科 *Motacilla alba*

(環境省 808 種) ー

(分布) おもに本州中部以北で繁殖。北海道のものは多くが南で越冬。ユーラシアからアフリカに分布。

(生態) 低地の水辺や市街地などにすみ、5～7月に岩や人工物のすき間や穴状の場所に営巣する。4～5卵を産む。産卵後12日前後抱卵し、15日前後に巣立つ。冬期には越冬個体が多くなり、1,000羽以上の集団むぐらも知られる。

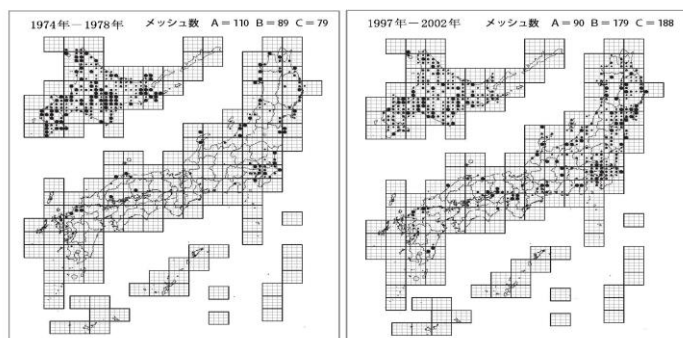


図 1-7 重要な生態系（鳥類：ハクセキレイ）の分布範囲

1-2 社会的環境

(1) 行政単位の変遷と集落

明治22年(1889)に市町村制施行によって、現在の輪島市、穴水町、能登町にまたがる鳳至郡の一部は、輪島町、鶴巣村、南志見村、河原田村、三井村、西保村、大屋村、鳳至谷村、岩倉村、西町村、町野村、櫛比村、黒島村、諸岡村、本郷村、浦上村、七浦村、劔地村、阿岸村、仁岸村に再編成された。町村合併促進法制定後の昭和31年(1956)に輪島市と町野町が合併し輪島市となり、門前町と劔地村が合併し門前町となった。平成18年(2006)2月1日に平成の大合併として輪島市と門前町が合併し、現在の新「輪島市」が誕生した。

表 1-6 合併の経緯

■ 明治以降の合併の経緯 ■

年	M22	M41	S5	S15	S29	S31	H18	
町		輪島町			輪島市	輪島市	輪島市	
		鶴巣村						
		南志見村						
		河原田村						
		三井村						
		西保村						
		大屋村	大屋村					
	村	鳳至谷村				町野町		門前町
		岩倉村						
		西町村	町野村					
町野村								
		櫛比村	門前町		門前町	門前町		
		黒島村						
		諸岡村						
		本郷村						
		浦上村						
名		劔地村	劔地村					
	阿岸村							
	仁岸村							

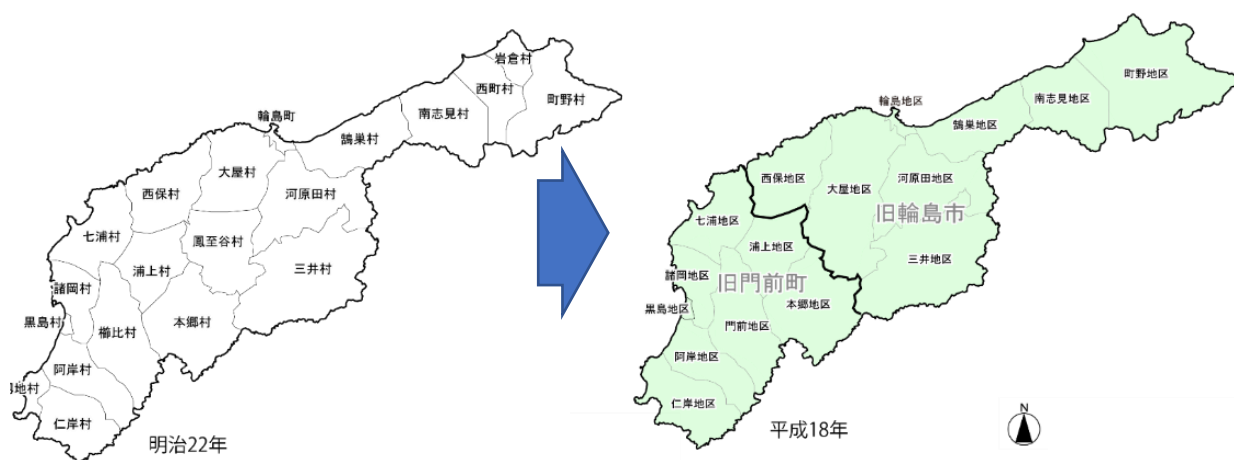


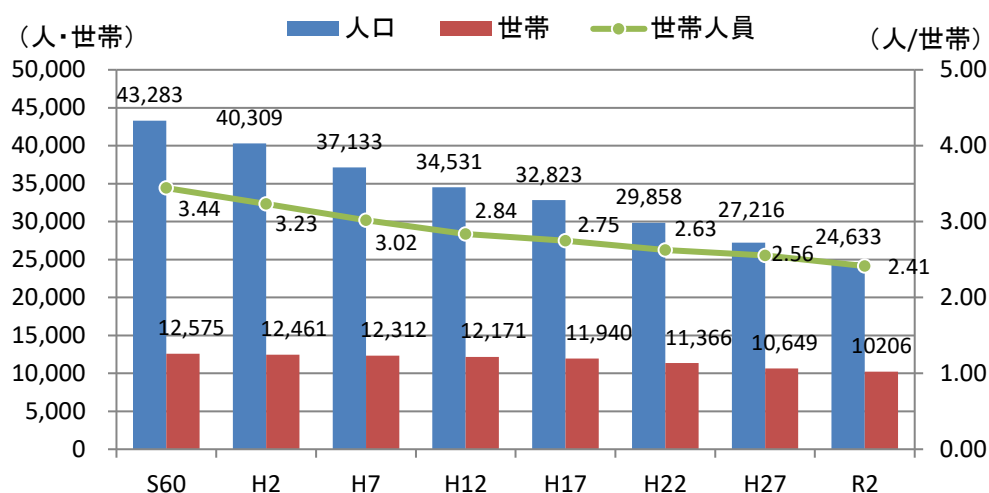
図 1-8 輪島市域の変遷

(2) 人口・世帯数等

本市の人口は、減少を続けており、平成22年(2010)から令和2年(2020)の10年間で、5,225人(約18%)が減少して24,633人となっている。

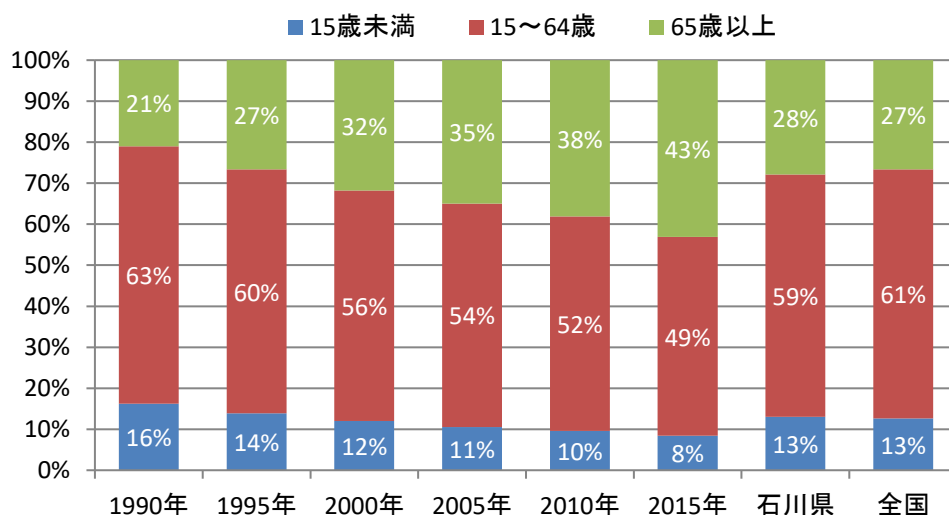
年齢別の人口では、年少人口(15歳未満)及び生産年齢人口(15～64歳)の割合が減少する一方、老人人口(65歳以上)の割合が増加し続け、平成27年(2015)には、高齢化率43.1%となっている。

表 1-7 人口・世帯数の推移



(国勢調査)

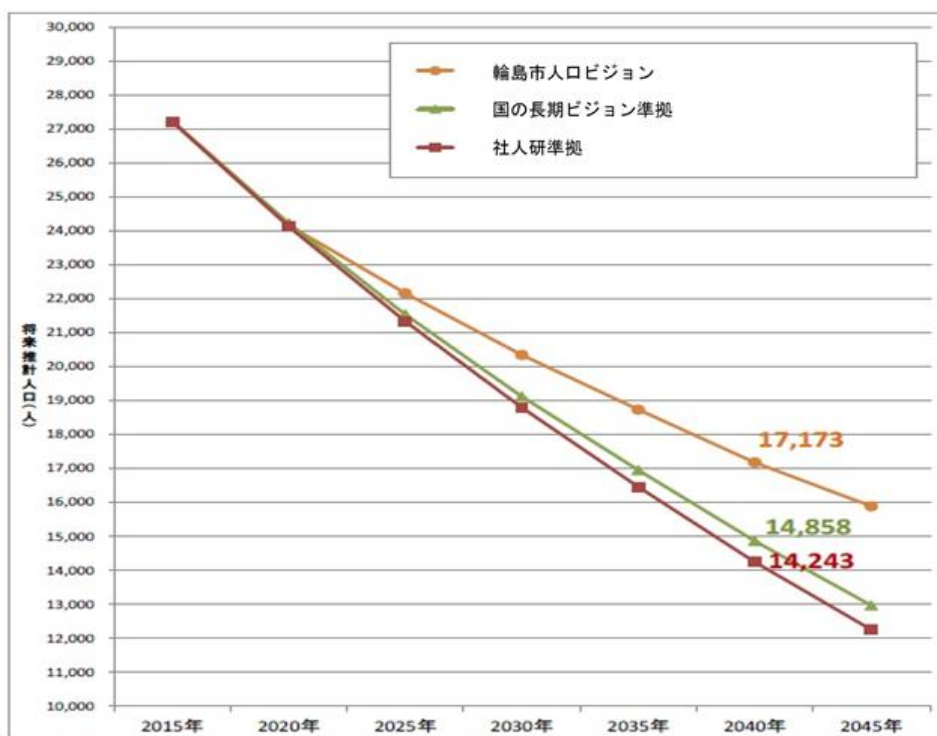
表 1-8 年齢別人口の推移



(国勢調査)

また、国立社会保障・人口問題研究所によると本市における将来人口推計では、令和7年(2025)には約21,000人となり、令和12年(2030)には19,000人を切り、さらに令和27年(2045)には13,000人を下回ることが予測されている。

表 1-9 将来推計人口



(国立社会保障・人口問題研究所)

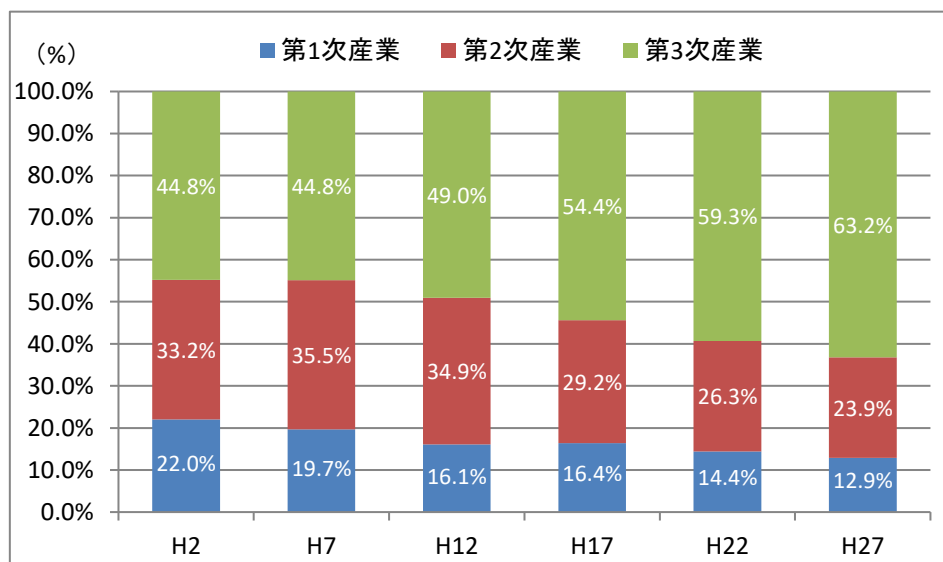
(3) 産業

本市は、江戸中期頃より技術が継承されてきた輪島塗が伝統産業としてあり、また、風光明媚な景勝地や歴史文化を感じられる土地柄から、小売業、宿泊業を中心とした観光産業も発展してきた。

平成 27 年(2015)の産業別就業者数比率は、第 3 次産業が 63.2%、第 2 次産業が 23.9%であり、第 2 次・第 3 次産業が大半を占め、第 1 次産業は 12.9%である。

平成 28 年度(2016)の市内総生産の構成をみると、小売業の割合が高く、市内総生産の 20.9%を占める。次いで、製造業 19.5%、医療福祉 11.3%、建設業 11.0%、宿泊・飲食業 10.7%の順となっている。

表 1-10 産業別就業者比率の推移



(国勢調査)

《農 業》

平成 27 年(2015)の「農林業センサス」によれば、経営体数(農家数)は 976 戸で、そのうち自給的農家は 25 戸、販売農家が 951 戸である。また販売農家については専業農家が 94 戸、第 1 種兼業農家が 143 戸、第 2 種兼業農家が 714 戸であり、経営規模別では、0.3ha 未満は 6 戸、0.3ha~1.0ha は 687 戸、1.0ha~3.0ha は 207 戸、3.0ha~5.0ha は 29 戸、5.0ha~10.0ha は 19 戸、10ha 以上は 6 戸となっている。

農業経営体による販売目的の作物別作付面積は、水稻が 1,070ha と最も多く、大豆 49ha、六条大麦 42ha と続いている。

《林 業》

林業は林野面積が 32,588ha であり、私有林が 81.2%を占め、公有林が 18.5%、国有林が 0.3%となっている。素材が 17,700 m³、食用きのこ類が 5,043 kg 生産されている。

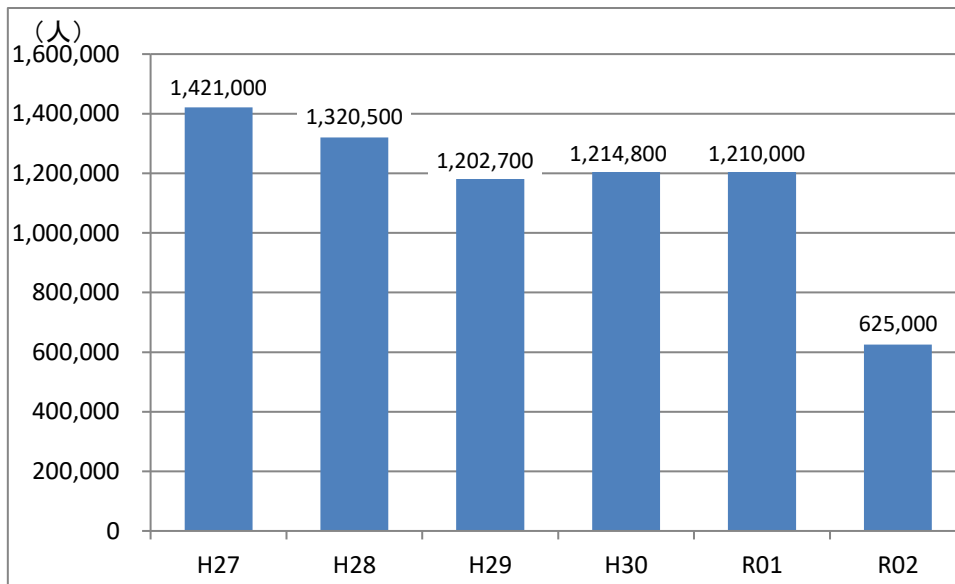
《漁業》

漁業経営体は219団体で、漁船10t未満のものが58.4%を占め、定置が1.9%、その他39.7%となっており、全てが沿岸漁業である。令和元年(2019)の漁獲量は5,907tで、まき網が29.8%、底引き網が22.0%、刺し網が15.5%、定置網が13.7%となっている。

《観光業》

本市への観光入込客数は、令和元年度(2019)で1,210,000人である。令和2年度(2020)は新型コロナウイルス感染症の影響により観光入込客数が減少しているが、全体としてはほぼ横ばいである。最も入込客数が多い施設は「輪島キリコ会館」で年間6.9万人を超える。

表 1-11 観光入込客数の推移



(輪島市統計書)

表 1-12 主要観光施設の入込者数推移

	H27	H28	H29	H30	R01
總持寺祖院	72,000	57,000	47,000	47,000	49,000
上時国家	34,000	19,000	13,000	12,000	9,000
輪島朝市	805,000	693,000	635,000	567,000	523,000
輪島キリコ会館	153,000	113,000	86,000	80,000	69,000

(統計からみた石川の観光)

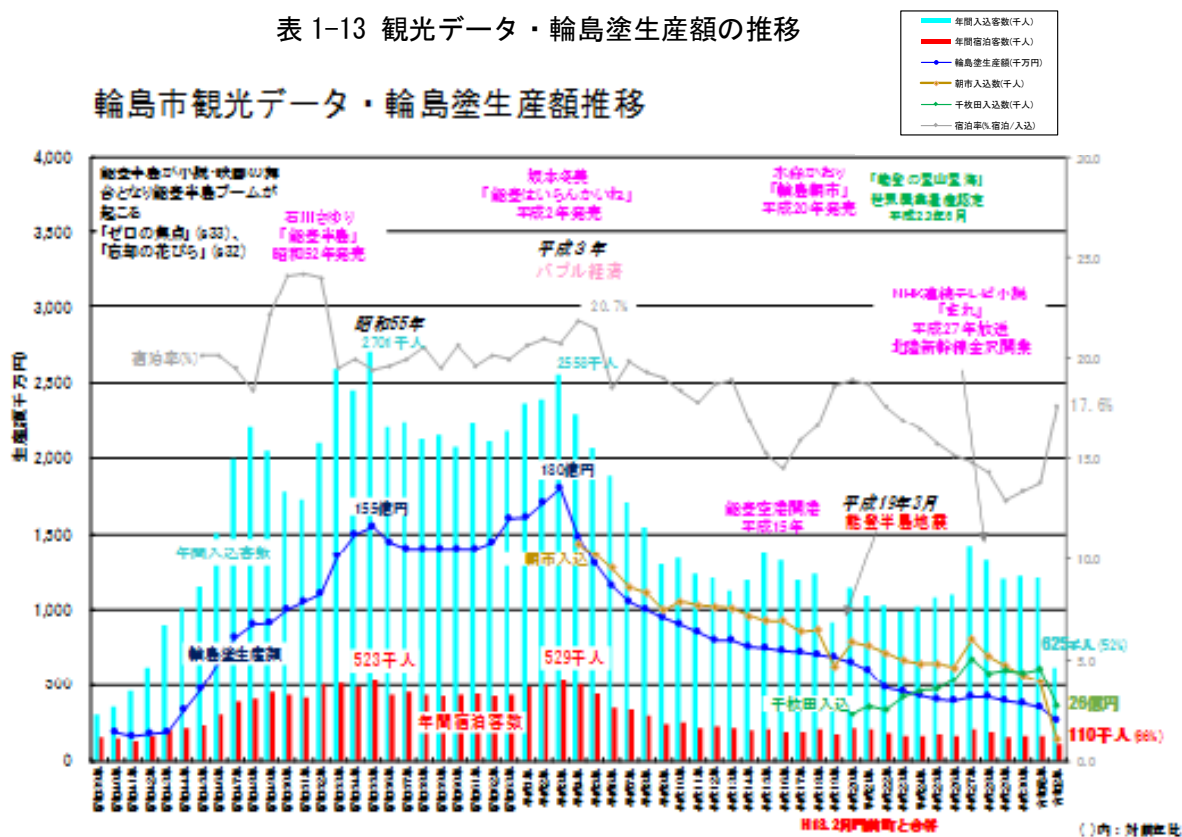
《漆器業》

代表的な地場産業である「輪島塗」の生産額は、平成3年(1991)の180億円をピークに減少を続け令和2年度(2020)では26億円まで落ち込み、事業所数もピーク時の約半数となる431事業まで減少している状況である。

本市の基幹産業である観光産業と漆器産業についての関係を見ると、観光入込客数は昭和55年(1980)の270万人、平成3年(1991)の255万人と好況を続けてきたが、長引く経済不況や能登半島地震の影響もあり、平成19年(2007)には91万人まで落ち込みをみせた。その後、様々な観光誘客事業を展開したことにより平成27年(2015)には142万人まで回復し、令和元年(2019)まで約120万人台を推移したが、新型コロナウイルス感染症の影響により令和2年(2020)は約62万人まで落ち込んでいる。

このように観光入込客数と輪島塗生産額は、相関関係にあり、里山里海の恵みを活かした新たな観光魅力の磨き上げにより誘客を促進し、伝統的工芸品産業の活性化を図ることが求められている。

表 1-13 観光データ・輪島塗生産額の推移



(輪島市観光課)

能登の塩づくり

能登の製塩は、古くは縄文時代に始まり、平安のころから次第に塩田が作られるようになったと伝わります。加賀藩では、寛永4年(1627)に塩生産者に米を前もって貸与し、その代物として塩を収納する「塩手米制度」を始めています。また、藩所有の塩釜を貸し出す「貸釜制度」も整備され、塩生産の普及と、塩の独占的収納体制を整備していきました。生産された塩は各地の塩蔵へ収納され、船により廻送されました。能登奥郡の塩の生産は30万俵以上におよび、加賀藩領内の塩生産の中心的な位置を占め、塩釜や薪の生産、海運業等などに大きな影響を与える重要な産業でした。

(5) 交通網

国道 249 号がほぼ沿岸部を東西に横断する形で走り、市の南側より県道 1 号が繋がる。市の中心部から県都金沢へは約 120km、車で約 2 時間を要する距離にある。市の南部に平成 15 年(2003)能登空港が開港し、首都圏へ約 1 時間でアクセスできる。



図 1-10 主要交通網 (輪島市都市計画マスタープラン)

伊能忠敬 (弟子：平山群蔵) の足跡

日本全国を測量して「大日本沿海輿地全図(伊能図)」を完成させ、国土の正確な姿を明らかにした伊能調査隊は能登にもやってきました。享和 3 年(1803)に始まった第 4 次測量では、同年 7 月 2 日に金沢城下に入り、能登へと北上しています。能登今浜(現 宝達志水町)で伊能測量隊は二手に分かれ、地形の険しい能登奥郡へは弟子の平山らが測量にあたっています。

平山は本市西部の仁岸地区(釵地地区)より測量にあたり、黒島地区や間垣景観で知られる上大沢、中心部の鳳至・河井、白米の千枚田等の沿岸各地を測量しており、険しい海岸の難所では舟から測量を行なっています。平山らはその後、松波(現 能登町)で伊能忠敬と合流し、伊能測量隊は富山へ向けて旅立ちます。平山らの測量隊は、本市の長い海岸線を僅か 7 日で測量を終えています。

(6) 景観

本市を含む能登半島は、自然公園法に基づく自然公園として、「能登半島国定公園」として指定されており、沿岸では対馬海流の影響を受けて浸食した、変化に富んだ景観がみられる。

本市は、「いしかわ景観総合条例」(石川県)に基づき、平成22年(2010)より市全域が景観計画区域として定められ、地域の特性に応じたきめ細やかな景観誘導が図られている。海岸や山など自然的景観要素が多く占める景観を「自然景観」、田園集落や道路など人の生活や行動などにより形成された景観要素が多く占める景観を「まちなみ景観」と設定している。

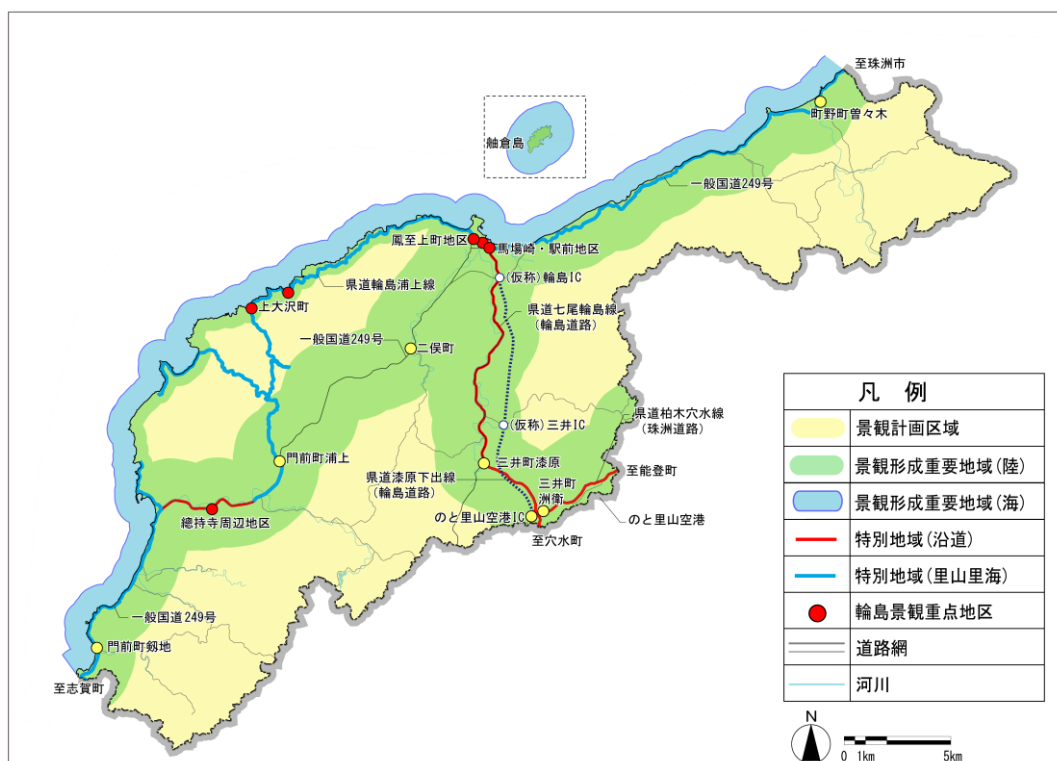


図 1-11 輪島市景観計画区域

本市の景観の特性は以下のとおりである。

《自然景観》

本市は、長い海岸線を有し、風蝕された岩等は変化に富んだ景観をみせる。海岸段丘や小規模な河川の下流域の僅かな平地に集落が点在しており、断崖などから望む美しい夕日や、漁火、星空等の夜間景観も多くの人を魅了している。

《まちなみ景観》

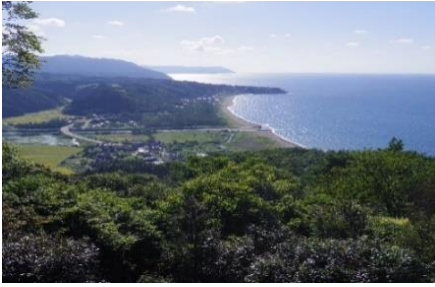
本市では、市域全体として低層の建物が多く、黒瓦、下見板張り、切妻造等の伝統的な外観を持つ建物が多数あり。里山では、生垣や前庭など敷地内を緑化するなど緑豊かな集落景観を見せる。漁村では、小規模な港湾を囲むように民家が密集し、また、集落の背後では、急勾配地形を活かした畑などの農地がみられる。



西保海岸



鴨ヶ浦海岸



岩倉山（町野地区）からの眺望



袖ヶ浜



總持寺周辺地区



黒島地区（船主集落）



農村景観（三井地区）



農村景観（金蔵地区）



漁村景観（鵜入地区）



漁村景観（上大沢地区）

《その他（生活景観）》

本市の中心部を北流する河原田川下流域では、3月頃になるとイサザ漁がみられる。イサザは九州から北海道までの沿岸域に生息し、産卵のために春になると河川に遡上する。漁期が近づくと川に足場が組まれ、四つ出網で漁をする姿は、春の風物詩となっている。

また、アジ等の魚や、採ったワカメを岩場で天日干し、鮮魚を加工しながら移動販売する姿は、漁師の営みが市民生活に密着していることを示している。



イサザ（春告魚）漁



ワカメ採り



鮮魚の移動販売



魚の天日干し（漁村景観）

1-3 歴史・文化環境

(1) 原始

輪島市域における人々の活動は約3万年前までさかのぼる。鳳至川と河原田川の間丘陵に位置する宅田上野山遺跡は、土器出現以前からの遺跡で、ここから石器が発見された。縄文時代に入ると、次第に河川流域に小規模なムラが形成され、中期以降には集落の規模も大きくなっていく。河原田川上流の三井新保遺跡をはじめ、塚田川近くの塚田遺跡、町野川近傍の寺地遺跡など、河川沿いからいくつもの縄文時代の集落遺跡が発見されている。

門前地区では、道下元町遺跡や、大生遺跡のほか、仁岸川上流の馬渡B遺跡などが知られ、門前地区を西流する八ヶ川の下流近傍の広和橋遺跡からは、呪術具と思われる県内最大級の大型石棒も見つかっている。また、広和橋に近い谷内和田遺跡からも石棒が見つかり、内保地内には「火の神様」として祀られている石棒もある。

弥生時代の遺跡も多数発掘されており、本市南部に位置する美登里ヶ丘遺跡が本市で確認された初めての弥生時代のものである。沖合の舳倉島では、深湾洞遺跡より石器が確認され、近傍のシラスナ遺跡で採集された鹿角製のアワビオコシは、三重県鳥羽市白浜遺跡から同形状のものが出土していることから弥生時代後期のものである可能性が指摘されており、当時の漁の様子を知ることができる。門前地区では、八ヶ川中流域に集落が形成されるようになり、八ヶ川河口の道下御墓遺跡、八ヶ川中流域の深田遺跡などがある。



広和橋遺跡から
出土した大型石棒



深湾洞遺跡から出土した石器



シラスナ遺跡から出土した
鹿角（アワビオコシ）

出典：海女習俗調査報告書（石川県）

(2) 古代

3世紀の中頃に大和地方(奈良県)から拡大した古墳文化は、4世紀中頃から北陸には広がりを見せ、権力階層の人々によって築造されるようになった。釜屋谷四ツ塚古墳群や大久保古墳群などがあり、6世紀後半には横穴古墳が作られるようになった。稲舟横穴群や大川横穴群などから耳環や玉類などの服飾品が多く出土しており、当時貴重だった玉類が多量に副葬されているのは輪島の横穴墓の特徴であり、これらは他地域の影響を受けたものとみられる。

また、稲舟古窯跡や洲衛古窯跡群などから、一帯が須恵器の一大生産地であったと考えられている。門前地区では、八ヶ川流域の山裾に古墳時代の集落遺跡が複数あり、背後の丘陵に高根尾A古墳群、清水古墳(奥能登最大の円墳)などの古墳が複数発見されており、八ヶ川を含む河川の合流地点を基盤として、「流域の首長」が出現したものと推定されている。舳倉島のシラスナ遺跡からは古墳時代のものと推定されるアワビ・サザエの貝類(貝塚)のほか、アシカの骨が確認されている。

奈良時代、天平勝宝9年(757)に越前、越中との分割・合併を経て能登国として立国し、能登国府は七尾に設置したとされる。現在の輪島市は、その中の鳳至郡の一部(大屋荘・町野荘・志津良荘・櫛比荘)に属し、郡内には大市、待野、三井の三駅が置かれた。それぞれの地域の遺跡から掘立柱建物跡などが確認されており、その中で大市の畠田遺跡周辺が、古代鳳至郡(輪島)の中心地と想定されている。

門前地区では、道下中山製鉄遺跡をはじめ、120か所以上の製鉄遺跡が発見されている。25枚の和同開珎が出土した奈良時代の深田まえた遺跡や、平安時代の掘立柱建物などが発見された本市百刈遺跡のある八ヶ川中流域が同地区の中心であったと有力視されている。能登が越中国に併合されていた天平20年(748)、万葉集で知られる大伴家持が越中守として能登を巡回した際に櫛師を流れる饒石川(仁岸川)で和歌を詠んだとされ、その歌碑が建立されている。



大伴家持歌碑

神の住む島

本市の沖合に浮かぶ舳倉島は、夏は海女漁で賑わいます。海女らは永禄年間(1558～1570)に筑前鐘崎(福岡県宗像市)より当地に移り住み定着したと伝わります。舳倉島の神を祀る神社は市内に複数ありますが、そのうち重蔵神社の社伝によれば、筑前鐘崎には宗像大社の三社(沖ノ島の沖津宮、筑前大島の中津宮、宗像市田島の辺津宮)があり、海女は宗像三社の三女神を当地でも敬うために、舳倉島に奥津比咩神社を建立、セツ島を中津比咩、重蔵神社を辺津比咩にそれぞれに比定したといわれています。

舳倉島では、このほかに海獣葡萄鏡や懸仏などが伝わり、古来より信仰の篤い島として知られています。

(3) 中世

中央では保元の乱を発端とし、栄華を極めた平氏が壇ノ浦の合戦で敗れ体制は瓦解、それまで権勢を振るった権大納言平時忠が能登へ配流された。これにより武家の存在感が増し、鎌倉幕府により長谷部信連が召し出されて大屋荘の地頭職に補任された。建仁元年（1201）に大屋荘南志見村に西光寺を建立するなど、一族はここを手掛かりに徐々に在地領主化し、さらには信連を始祖とする長氏は鳳至郡の各地で勢力を伸長していった。永仁4年（1296）、重蔵宮御宝殿（輪島）の棟札に長氏一族が名を連ねている。

河原田川下流域では、半島の先端部の立地を活かした湊町が開け、日本海の隔地間交易の要港として、小屋湊（親湊）と呼ばれて賑わっていた。ここを長氏に代わり台頭してきた温井氏が治めるようになる。温井氏や長氏は、応永13年（1406）より能登守護となった畠山氏（居城 七尾城）の重臣として鳳至郡の多くの範囲で統治を担っていた。大永4年（1524）に輪島の重蔵宮の造営がされており、棟札に「大屋庄輪島河井村」とみえ、これが輪島の地名の初見とされる。大願主には温井宗孝が知られ、以降、温井一族は輪島を拠点とし勢力を拡大してゆく。温井氏は家中で権力を強め、守護畠山氏を傀儡化し、七尾城の主導権を握るまでになる。しかし、内乱により一族は失脚し加賀へ退去した。天正9年（1581）、前田利家は、織田信長の対上杉政策によって能登に進駐し、能登一国を領有して七尾を拠点とすることになり、天正10年（1582）、前田利家らとの荒山合戦で敗れ温井氏は滅亡した。

鳳至郡内には畿内の寺院による荘園支配を背景に、天台や真言系（石動山）の密教寺院が多く存在していた。荘園領主や在地荘官らの信仰を受け発展し、輪島の町野の高田寺、門前の鵜山の春日神社、道下の宝泉寺などに、平安時代から鎌倉時代の数々の木造仏像が伝わっている。新仏教の広まりにより、能登まで教線を進めた瑩山禪師が、櫛比荘最古の寺院とされる諸岳観音堂の定賢権律師より寄進を受け、元亨元年（1321）に「諸岳山總持寺」が成立している。以降、天皇家、足利将軍家、地頭長氏一族、能登守護吉見氏・畠山氏などの外護をうけてきた。そして加賀・越中・能登（加越能）の三国を領する前田家からは幕末に至るまでの外護を受け、これは總持寺の運営の安定、さらには発展の大きな要因であった。



長谷部信連の墳墓



曹洞宗大本山總持寺（祖院）

(4) 近世

近世の輪島は加越能を領する前田家の統治下におかれたが、関ヶ原の戦い後、慶長 11 年(1606)に越中の土方領が能登 62 カ村に分散された。

この土方領は貞享元年(1684)より幕府領となったが、鳳至郡に 22 カ村あり、輪島の井面、大野、伏戸、時国の 4 カ村、門前の黒島の 1 カ村であった。

河原田川河口に開けた小屋湊(親湊)は、輪島村であった鳳至、河井、海士、輪島崎の四地区の港で、室町時代に成立したとされる廻船式目の中で既に重要な港湾として認識されていた。寛永 16 年(1639)、三代前田利常の時に藩米の効率的な運搬を目指して日本海沿岸の航路の開拓を行い、後に河村瑞賢により西廻り航路が確立されると、輪島はその主要な寄港地として繁盛した。海運業や漁業のほか、朝廷や幕府、本願寺等への献上品でもあった素麺、大本山總持寺とのつながりで全国に販路を拡大したとされる漆器(輪島塗)、加賀藩の施策による製塩など産業・商業活動が活発であった。

江戸時代中期頃には、北前船と呼ばれる北海道と大坂を結んだ大型の買積船が往来し、鳳至の海運業者の久保屋、蔵宿・金融業の中島屋、河井の廻船問屋の米屋などが近世輪島を支えた。町野では能登に配流された平時忠の子孫と伝えられる時国家が地域商社として豪農の枠に収まらない海運などの幅広い活動を、門前では總持寺の外港的役割を果たした黒島の船乗り達が日本海沿岸各地で活動をしている。

活動の痕跡として、輪島の沿岸各地の神社には多くの船絵馬が奉納され、小屋湊に近い奥津比咩神社には渡海船の模型や板図が伝えられているほか、他地域との交流により伝わったとされる輪島まだら(民謡)や、俳諧などの文化芸能に励み、当地に有形無形の文化が今日まで伝承されている。



日和山の方角石



船絵馬群



千石積渡海船の模型と板図

(5) 近現代

明治2年(1869)の版籍奉還により加賀藩は金沢藩に、そして明治4年(1871)の廃藩置県によって金沢県とされた。これ以降、県境の変更が行われ、明治16年(1883)に現在の石川県域が定められた。

明治の新政府の施策により日本中で近代化が進められ、輪島にも郡役所や警察署、税務署、郵便局など、諸官庁の出先機関が次々と設けられた。一方、明治43年(1910)に河井を中心に大火に見舞われ、多くの家屋をはじめ、公会堂や郵便局、銀行、劇場のほか、かつての輪島の領主である温井氏が寄進した重蔵神社などが焼失した。

門前では明治31年(1898)に總持寺の伽藍のほとんどが焼失する惨事となった。總持寺の再興と並行して、寺院の東京付近への移転も計画され、本山機能は横浜鶴見へ移転し、能登の總持寺は別院(後に祖院)として再興された。

このような災禍からの復興と、これまで沿岸を結んだ帆掛け船での交易は汽船や鉄道に取って代われ、陸の孤島となった能登では道路や鉄道、近代的な港の整備が急務となっており、新たな産業の振興を目指すこととなった。

明治の終わりから大正にかけて電話や電気が徐々に整備され、昭和10年(1935)に鉄道が開通することとなる。輪島港は輸送中継港のほかに沿岸漁業の基地としての機能を持ち、輪島崎の先端に段階的に防波堤が整備されている。

第二次世界大戦が終戦を迎え、輪島は空襲を免れたものの、農地改革で輪島塗の最大の顧客であった地主層が没落し、輪島塗は大きな痛手を受けたが、高級割烹用品として、また高級な一般家庭用品として生き残りを図っていった。昭和32年(1957)には、町野の曾々木海岸や時国家でロケが行われた映画が放映されたことをきっかけに観光客が急激に増え、昭和40年代に本格的な能登ブームが到来して朝市や輪島市街地に多くの観光客が訪れるようになり、観光産業が盛んになった。

一方、第一次産業は全国的な傾向と同様に従事者の減少が進んでいったが、海女漁や、白米の千枚田に代表される棚田等で伝統的な農林漁法が継承され、間垣、茅葺住宅、三井町のアテ林など、農山漁村の原風景とも言える里山里海景観が守られていることなどから、「能登の里山里海」は平成23年(2011)に日本で初めて世界農業遺産に認定された。また、豊漁や豊作を祈願する「キリコ祭り」や田の神に感謝する神事「あえのこと」や「ぞんべら祭と万歳楽土」など、各地で風土に根差した四季折々の祭礼や風習が継承されている。このように、輪島市域全域で、多様かつ重層的な歴史文化を伝えている。



万歳楽土